様式第 14 号　研究内容報告書

研究テーマ	第 1 回宮中御養蚕～田島武平と島村の女性たち 飯島曽野の日記から読み解く
研究者・団体名	さいたま絹文化研究会　藤井美登利　シーラクリフ
研究要旨	明治 4 年第 1 回宮中養蚕に関わった深谷本陣の妻女飯島曽野の日記はあまり知られていない。田島武平が選んだ 4 人の女性のなかから、飯島曽野の日記をもとに宮中養蚕に関わった女性たちの活躍について明らかにする。

研究内容

1. 研究の内容

はじめに、本研究で検討することがらについて、その概略を述べる。

・飯島家では子孫が飯島曽野の日記を現代語訳にしている。田島武平の子孫、田島信孝氏も武平が残した日記などを現代語訳しているので、それらと飯島曽野の日記を突き合わせ、宮中御養蚕の背景を明らかにする。

・養蚕の様子は他に先行資料があるので、美子皇后との関係や養蚕が終わり、帰郷前の東京での曽野たちの行動を明らかにする。新島原遊郭、浅草の写真館、江戸の高級料亭「八百善」、三囲神社参拝などの東京観光の一日を考察する。「八百善」は今も現存し、江戸料理を提供しているので当主に伺う。

・飯島曽野の日記には宮中に持参した掛け軸、美子皇后が可愛がった猫、ご褒美に頂いた下賜品などの記載がある。また、3 歳の娘を深谷の義母に託して東京にでかけており、家族への手紙も残されている。

2. 調査の方法

関係者子孫への聞き書きをメインに調査をした。

・深谷本陣遺構を守る飯島のり子さん（飯島曽野は高祖母）

・田島武平子孫、田島信孝さんを訪問し、聞き取り調査。武平旧宅に開設されている「桑麻館」訪問調査。

・料亭八百善の 10 代目及び、8 代目に嫁いだ女性の子孫

飯島家にて曽野が宮中に持参した軸を拝見

曽野たちが昼食をした八百善は横浜で営業している

◆はじめに

現在も皇居で行われている皇后陛下のご養蚕のはじまりは、1871 年（明治 4 年）に明治天皇の后美子、後の昭憲皇太后が「宮中において養蚕をはじめたいので、その道の知識経験のある者に聞くように」という要請を発し、渋沢栄一が担当となり始められた。渋沢は当時大蔵省で多忙であり、養蚕の知識が豊富な親戚の田島武平に世話役を依頼した。武平は 4 人の養蚕に熟練した島村の女性を選び、第 1 回宮中御養蚕は 1871 年 3 月 13 日から 5 月 6 日まで行われた。田島武平、栗原ふさ、飯島曽野の 3 人の日記が残されているので、それを突き合わせながら、4 人の女性たちの行動、東京での滞在について明らかにしたい。

◆宮中養蚕は誰の発案か？　美子皇后の成育歴

美子皇后は五摂家のひとつである一条家の生まれ、当時の皇后は五摂家から選ばれていたので幼少のころから皇族に嫁ぐための教育をうけてきた。「女四書」を 10 年以上教育され、「国母」であろうとする強い責任感を培われてきた。「源氏物語」も暗記するほど読み込んでいたという。幕末動乱の京都で目の前の御所が禁門の変で激戦地となった際には、変装をして避難をするという体験もしている。1868 年に満 19 歳で明治天皇と結婚。天皇より 3 歳年上である。初お目見えの席で天皇と将棋を指すなど、物怖じしない性格。69 年 10 月下旬に皇居に入った美子皇后が、71 年春に養蚕をはじめるためには、70 年の秋ごろから相談や計画を始めなければならない。『宮中養蚕日記』著者高良留美子は「皇后の発意といっても、まわりがお膳立てしたのではないか、という考え方もある。しかし、維新後の多事の折に、1200 年以上例のなかった皇后の養蚕を進言する側近がいたとは考えられない。養蚕のことを知る公家官僚は一人もいなかったであろう。政府でも渋沢栄一だけが知っていたのだ。」という。皇后は渋沢から直接養蚕について話を聞いている。宮中養蚕は 22 歳の皇后の強いリーダーシップがあってのことであろう。同じ年 1871 年は、政府が最大の難関だった廃藩置県を実行し、軍制や貨幣制度（渋沢栄一が関わる）を定めて政権の基盤を固めた年でもある。当時輸出品 1 位の生糸の質を向上するために官営富岡製糸場開設が決定したのはその前年のこと。殖産興業としての生糸に美子皇后は強い関心をもっていたのであろう。富岡製糸場が開設されると早い時期に皇太后と共に訪れ、「糸車、とくもめぐりて大御代の富をたすくる道ひらけつつ」という和歌を詠んでいる。生糸が大御代の富、国富につながることを皇后が確信していた証である。

◆田島武平が世話役となり 4 人の女性が宮中へ

渋沢栄一は宮中御養蚕の世話人を島村（現在の伊勢崎市）の田島武平に依頼している。その理由を世話役に選ばれた理由を子孫の田島信孝氏に伺った。

「武平が渋沢栄一に宮中御養蚕の初代世話役を頼まれたのには明確な理由があります。武平の妻女シゲは、栄一の父方の従妹に当たります。さらにシゲの妹は、栄一の生涯の友で従兄でもある渋沢喜作に嫁ぎました。それにより、武平と喜作は義兄弟になりました。栄一は武平の 7 歳年下でした。武平は幕末には蚕種を養蚕農家に販売する種屋としての事業を成功させており、また、江戸や秩父から高名な学者を招いて私塾を開き、そこには若き頃の栄一が参加していました。明治初期には横浜にて蚕種の輸出事業に大きく関わり事業も拡大、1871 年明治 4 年、38 歳のころには岩鼻県（現在の群馬・埼玉県）の郷長になっていました。」　田島武平家 10 代目　田島信孝氏談

田島武平は 1871 年 3 月 4 日に岩鼻県を通じて宮内庁から、養蚕に熟練した 4 人の婦人を至急人選するようにという書簡を受理。武平は親戚筋の 10 代から 40 代の女性 4 人を人選し、選ばれた 4 人は慌ただしくしたくを整え、なんと 4 日後の 3 月 8 日には、島村から利根川を下り上京している。そのうちのひとりが本稿で主に取り上げる深谷本陣の妻女、飯島曽野である。曽野が記したこのときの道中記を読み解くことが本稿のテーマである。曽野は島村の武平家の分家・隣の養蚕蚕種製造家・田島弥平家の娘であり、兄が田島弥平二代目である。その他の 3 人も同じ島村出身でみんな顔見知りであった。突然の話であり、3 日間ほどで長逗留のための身支度を整えなければならない。しかも 28 歳の曽野は、3 歳の女児を義母に託しての出立である。突然のこと

に驚きながらも宮内庁からの話に岩鼻県、世話人の武平、4 人の係累も家門の誉のこととして送り出した。限られた時間の中、宮中へご奉仕ということで 4 人は丸帯を新調し、斎戒沐浴（神聖な仕事に従事するのに先立ち、飲食や行動を慎み、水を浴びて心身を清めること）で船に乗り込んだ。

武平に選ばれた 4 人の女性

前列左より飯島曽野（28 歳）、栗原ふさ（20 歳）、田島たか（48 歳）、田島まつ（17 歳）。後列　用心棒の田島弥九郎

◆「宮中御養蚕日記」を記した飯島曽野の嫁ぎ先　深谷本陣　飯島家について

曽野の玄孫である飯島のり子さんに伺った。

「飯島家は元は武田家の家臣で、武田家滅亡の後に浪人となって深谷に定着しました。1752 年から本陣職をつとめています。参勤交代の際に大名や幕府公用人が休憩宿泊するための施設です。幕府は苗字帯刀、門、玄関、上段の間の敷設などの特権を与えて存続させましたが、本陣は経費もかさみ持ち出しも多く、前任者は本陣職を返上したそうです。1866（慶応 2）年の 1 年間の記録をみると休憩・宿泊は僅か 33 件で、商売にはならなく本陣経営はまったくの奉仕事業でした。かつては敷地 630 坪、建坪 117 坪玄関付き門構えでした。明治 10 年に大火があり、表門、土蔵、老松などが焼失し、現在は上段の間、次の間、入側が現存しています。皇女和宮様が江戸城へお輿入れのさいご休憩され、お草履を拝領しています。家宝として大切にしております。」

本陣利用者は大名の他、幕府公用人で一般人は利用出来なかった。本陣職は休泊業務の他、問屋場（といやば・人馬の継立、助郷などを行う所）、幕府や代官からの宿住民に対する申し渡し役なども兼務していた。

明治 3 年に本陣制度が廃止され、明治 5 年には郵便制度ができ、飯島家は郵便御用扱いを仰せつけられている。深谷郵便局初代局長として記録されている。現在も営む印刷業は明治 38 年に始めた。

曽野が宮中養蚕から戻ると、今度は亭主の元十郎が義兄の田島弥平とともに横浜に 2 ヶ月ほど蚕種販売で出かけている。1879 年（明治 12）の宮中御養蚕には、元十郎の弟の太十郎（24 歳）が育蚕作業に奉仕にあがっている。飯島家も曽野の実家、田島弥平とのつながりのなかで蚕種、養蚕に関わっていたことがわかる。

家宝として伝わる皇女和宮の草履

◆本陣飯島家に残る書画とゆかりのひと人

幕府の文書行政に関わった林述斎大学頭が朝鮮通信使の役目で対馬に赴き、帰路に宿泊した際に、庭前の松を眺めて上段の間を「晩翠堂」と命名し、揮毫をして主人に贈っている。書は額装され壁面に現存する。復斎の従者、岡本花亭（岡本太郎画伯の祖父）による掛け軸、また、林述斎の息子、林復斎（米国ペリー艦隊来航

の際の日本側交渉責任者）の漢詩の揮毫もある。伊能忠敬は中山道の地図作成で宿泊している。皇女和宮の他、13 代将軍家定公に嫁いだ鷹司家有姫なども休憩している。

◆宮中御養蚕日記の発見

飯島曽野の宮中養蚕日記

飯島家に現在伝わる飯島曽野の宮中御養蚕日記は、1998 年（平成 10）に飯島のり子氏の父、康造氏が蔵で偶然発見したものである。これは備忘録、メモのようなもので、戦前までは大判の宮中御養蚕日記があったが、東京で戦災にあい焼失している。その経緯をのり子氏に伺った。

「1934（昭和 9）年に昭和天皇が群馬県での陸軍大演習にいらした際に、前橋蚕業試験場に第 1 回宮中御養蚕の関係資料が展示されました。その際に、当家から曽野の日記（大判）が展示され、陛下にご覧頂きました。日記は『賜天覧』と朱色の印影が押され返却されたため、家人は永久保存を願い、桐箱を調整し、その箱書きを交流のあった文豪、徳富蘇峰先生にお願いするために東京の経師店に預けておいたのです。ところが、なかなか箱書きが出来上がらないまま、その経師店が 1944（昭和 19）年 10 月の東京大空襲で被災し、我が家の家宝というべき日記は焼失してしまいました。それ以来、祖父も父も曽野の日記はこの世から消滅したものと長く信じていました。父が蔵の中に落ちていたというこの小さな日記を見つけた時は、まさか焼失した大判の日記の控えとは思わなかったようです。後に古文書を読める方に解読してもらい、焼失した曽野の日記の備忘録とわかったのです。それ以来、父は、この日記の読み解きを本にまとめることをライフワークとして取り組みました。2017 年に父は 96 歳で亡くなりましたが、その遺志を継いで私家版の『第 1 回宮中御養蚕日記』を 2019 年に上梓しました。このような経緯も含めて、きちんとお曽野さんの子孫である子どもたちに伝えていきたいです。」＊徳富蘇峰は島村にも懇意の家があり、そのつながりで飯島家も箱書きなどを依頼したという。

◆「新刻蚕養之図」明治 4 年発行　歌川国輝

飯島家には「賜天覧」と印章のある錦絵が残されている。これも日記とともに昭和 9 年に前橋蚕業試験場に展示され、天覧に供したものである。この錦絵は第 1 回宮中御養蚕を描いたもので、中央に若き日の明治天皇の后美子（後の昭憲皇太后）が描かれ、飯島曽野を含む島村からの 4 人の養蚕婦が名前入りで描かれている。左から 2 人目で座って作業をしているのが曽野。

昭和天皇はこの錦絵の前にて場長（岩場時蔵）の説明を聞き、即座に不動の姿勢を取られ脱帽注目されたと後日、岩場場長が感激して語ったと伝わっている。この錦絵は飯島家に今も大切に飾られている。

「賜天覧」と印章のある錦絵

左から 2 人目が曽野。4 人の名前も記されている。

◆曽野が宮中に持参した掛け軸

島村に縁のある 3 人の画家が曽野に贈った画幅である。渡辺鴎舟、金井研香（毛山）、田島霞山（曽野の弟）が寄せ書きのように蚕婦を描いている。

「この掛け軸は、曽野が宮中にご奉仕に行く際に、画家である曽野の弟の田島謙三郎（霞山）から贈られたものです。3 人の画家が描いています。宮中の蚕室の床の間に掛けられ、皇后さまも興味深くご覧になられたと伝わります。4 人の蚕婦が漫画のように描かれており、これに目を留めた女官たちは、扇で口許をおおいながら笑いこぼれたそうです。この画幅の風俗と、曽野たち 4 人の蚕婦の様子が良く似ていて、また、珍しい姿に映ったのであろうと言い伝えられています。後日、島村の田島弥平家から漢詩の軸も東京の曽野のもとに送られています。」

曽野が高祖母にあたる飯島のり子さん。

◆明治 4 年の東京の様子、宮中御養蚕の評判

宮中御養蚕の評判について明治 5 年の第 2 回宮中御養蚕をまとめた「宮中養蚕日記」の著者高良留美子が当時の様子を述べている。高良は 2 回目の宮中養蚕に奉仕をした田島弥平の娘、民の子孫である。民は曽野の姪にあたる。第 1 回の宮中御養蚕が始まった 1871 年（明治４）は、新聞が広まった時代でもある。宮中養蚕が始まると、大蔵省は『横浜毎日新聞』などを買い上げて、各府県に配布した。

「皇后の養蚕を広く伝えるという意図のもとに、当時大蔵省にいた渋沢栄一が命じたと考えられる。渋沢はパリ時代から新聞に興味を持っていた。また、幕末から明治 20 年頃までは養蚕錦絵が多く発行されていた。絵師が想像で描いた多色摺の木版画で天皇、皇后が見守る中、女官たちが養蚕や製糸に励んだり、皇后が手元で蚕を飼育したりする様子が描かれている。錦絵は 19 世紀後半のマスメディアであった。皇后の養蚕は渋沢の狙い通り、当時のトピックのひとつになったのだ。」と高良は述べている。飯島家に残る錦絵もそのひとつである。

同じく高良は石井研堂による『明治事物起源』のなかに「桑茶栽培の流行」という項を見つけ次のように紹介している。「明治 4 年の春、皇后陛下、蚕業の業を習はせ給しことありし。されば国民一般も、聖意のある所を察し奉り、東京市中にさへ、少しの明地あれば、桑又は茶を栽培し、5 年の春ころは、一種の流行となりた

し」。ただこの流行は市民から皮肉な目でみられもいたようだと言う。諸藩邸旧旗下等、各地に移転せしより、人家変じて桑茶園となり、商売自ら生計を失うに至るとあり、近頃世に行はるる物のなかに『桑茶園』を挙げ、馬鹿の番付に『結構なる田地をつぶし、茶桑を作りて損をする人』などいへる如く、当時桑茶の記事は甚だ多し」。と紹介している。桑畑開墾は一時のブームにはなったがそれで経済的に潤うことにはならなかったようだ。第 1 回宮中御養蚕では、宮中の吹上御庭の桑を主に使い、紀州の和歌山藩から葉付きの桑枝５００株、岐阜の野村藩から４６００株が献上されている。翌年、第 2 回宮中御養蚕の際には代々木村から桑の葉を数回に分けて取り寄せている。

明治 4 年（1871）の東京の人口は 48 万人ほどで、天保期（1844）の頃の江戸の推定人口 130 万人に比較すると激減している。参勤交代制度が廃止され、天下の城下町でなくなり、幕末維新の動乱期を経て都市としての江戸は凋落した状態であった。「江戸以来の市民には旧幕意識をもつ人々も多く、文明開化に邁進する明治国家を素直に礼賛する気持ちにはならなかったのだろう」と高良は述べている。

現在、養蚕錦絵はシルク関連の博物館等で展示されることも多く、幕末から明治 20 年にかけて 200 種類以上のものが刷られている。田島武平旧宅の２階を資料館として公開している島村の「桑麻館」にも田島信孝氏が収集した宮中御養蚕錦絵が多数展示されている。

◆宮中御養蚕中のエピソード

１）ネズミの被害　大事件なり～皇后と猫

5 月 26 日の曽野の日記には、平井様（宮中の担当者）が町より親子の猫５匹持ち来たるとあり、後日、美子皇后がその猫と遊ばれて「良き猫」とお言葉をかかる。と記されている。

田島武平の日記（荒木大七郎が報告）には報告し忘れた大事件とあり、掃きたて後のまだ小さな蚕がネズミの害にあい、3 夜ほど大いに荒らされた。急遽、ネズミ除けのための子猫を借りたが、何分子猫で力が足りず、このような結果になってしまった。その後、官員に頼み 4 匹の乳猫を持つ親猫をお借りしたところ、優秀な猫でネズミを捕まえ、それ以来一切被害はでていない。以来、母子の猫を借り続けたところ、はじめの子猫が 4 匹の乳猫を邪険にし、噛み倒して自分だけが乳を飲みたがり、母猫も大きい方の子猫を可愛がり、乳猫を構わなくなってしまった。このままでは高官が飼っている猫でもあり、乳猫がケガでもしたら申し訳ないので、その筋に伺ったところ、払い下げてもよろしいとのことだったので、さっそく頂戴した。誰のものになるのかまだ決まっていないので、とりあえず、三河屋旅館に食料を添えて預けてある。この猫は、かたじけなくも 2 度も皇后陛下行啓の際に直接お手でお触れになられた猫なので、大切に育ている。ネズミにおよそ 1 万匹も食べられてしまい、お蚕がだいぶ減ってしまったのは残念。このことをお含みおき頂きたい。という内容の報告が、武平の日記に記録されている。養蚕がさかんになった江戸期から、猫はネズミ除けに使われたり、蚕室に「猫絵」を豊蚕祈願として貼り、蚕や繭を食い荒らすネズミをよけるまじないとする風習があった。宮中でもネズミの被害には猫を使っていたことがわかる記述である。三河屋に預けられた皇后陛下の猫はその後、どうなったのか気になるところではある。

２）京都の皇太后（英照皇太后）へ繭を贈る

4 月 16 日、京都に住んでいる皇太后（英照皇太后）へ贈るための準備を曽野が仰せつかり、上繭 15 粒を選んだ。1873 年（明治 6）には、美子皇后と皇太后（英照皇太后）は開業したばかりの富岡製糸場に行啓し、生糸が日本の富国につながると、励ましている。皇后、皇太后の繭、生糸への関心の高さが推測できる。

３）22 歳の美子皇后は蚕が大好き

女官たちのなかには蚕を気味悪がるものがいる中、美子皇后は夜遅くまで専門書を読み、自分の部屋（奥）近くにも蚕を持ち帰り、手元で飼育をしている。4 人の女性たちは交替で毎日 1 名づつ奥へお手伝いに行き、度々お菓子などを頂いて戻っている。明治天皇も関心をもたれ、乗馬や近くの茶屋の帰りに蚕室を 8 回も訪問され

た。

３）第 1 回宮中御養蚕は豊作にて終了

世話人の武平は養蚕の準備が終わり掃き立てが開始してからは、岩鼻県の郷長としての行政業務、鬼怒川沿岸の新田開発、輸出蚕種の暴落問題などで多忙を極めた。そのため、現場にはあまり顔を出すことが叶わず、信頼する荒木大七郎に監督を一任していた。荒木から随時報告があったが、その荒木も病気がちで、日々天候や飼育の臨機応援の対応などは、全て 4 人の女性たちが自分たちの経験を活かしながら判断していた。この年は悪天候が続き、昼夜焚火を行って低温を凌いだという。ネズミの被害にはあったものの、70 キロの収穫があった。。繭の一部は伊勢神宮に奉納され、残りの繭は深川授産場の婦人 6 人により繰糸され、羽二重と綸子に織られた。初めての宮中御養蚕は無事に成功した。

◆47 日間の宮中御養蚕を終えて～帰郷までの日々

慣れない場所での養蚕を無事に終えた 4 人の蚕婦たちは、さぞほっとしたことであろう。曽野や栗原ふさの日記から帰郷までの東京での様子を見てみよう。

5 月 7 日・・・御役目がおわり、午後 4 時に吹上御庭を下がる。戸田大丞より「おおきにながなが御くろう」と御ことばをいただく。皇居退出前、皇后御所の女官たちが大勢糸取りのお祝いに集まり、そこで蚕婦が国に帰る際の土産にするようにと、皇后から下賜されたお菓子を文書箱にいれて持たせてくれた。定宿の三河屋に引き上げた後、曽野はあんまを呼んでもらい、マッサージをうける。お役目が終わりほっとしたのか、お腹の具合が悪くなり、胃薬（下剤）を飲んだ。

5 月 8 日・・・お腹の具合が悪く一日三河屋にて休息

5 月 10 日・・・この日に吹上御庭に呼び出しがあり、御天杯、煙草入れ、袂落とし、3 品と神酒をご褒美としてもらう。（後日この品々を持参し、写真館で撮影）。飯島家にはご褒美の袂落とし（女性用の袋物の一種）が家宝のひとつとして残されている。武平にもこの時に収繭した白繭と黄繭の 2 種の出殻繭を瓶の中に保存したものが贈られ、今も大切に保存されている。

5 月 11 日・・・夜、新島原遊郭へ出かける「面白く遊び申し候」（蚕婦 4 人と用心棒の弥九郎）。

明治 2 年に開設された外国人用遊郭、現在の中央区新富町に作られた。遊女屋 65 軒、茶屋 59 軒の大規模なものだったが、周辺（築地居留地）に来る外国人は宣教師・医師・外交官が多く、商人が少なかったため需要がなく、明治 3 年 6 月には廃止が決定。遊女たちは明治 4 年 7 月には新吉原に移されたという。曽野たちが見学した時期は、すでに遊郭としては廃止が決まっていた。余談であるが、明治 5 年に行われた第 2 回宮中御養蚕では、同じく島村の蚕婦 11 人がご奉仕しているが、彼女たちの何人かは新吉原遊郭の見学に出かけている。島村の女性たちの闊達さ、行動力、好奇心の強さは頼もしい。養蚕という生業で培われたものであろうか。まるで観光名所のような当時の遊郭についても興味のあるところである。明治 5 年に新島原一帯は銀座の大火で全焼し、その後、新富町となり、遊郭のまちから花街（芸者衆のまち）へと変貌していった。

5 月 12 日・・・髪を結い、大和屋にて 3 歳の娘、ひさの帯を購入。帰郷も近くなり、深谷に残してきた娘のお土産を買っている。東京逗留中も、深谷の義母からは「3 歳のひさはむずかることもなく、良い子にしいるのでご安心くだされ」という手紙が届いている。曽野が宮中で下賜されたお菓子を、深谷の義母に送っていることのお礼も書かれている。義母のもとに残してきた 3 歳の娘のことがいつも気になっていたであろう。

5 月 12 日・・・朝 8 時に起きて、絞りの単衣の着物を大急ぎで縫う。季節が移り、持参した袷のきものから単衣ものを着る陽気になったのであろう。翌日に浅草の八百善に昼食に行くためにきものも新調したかったのかもしれない。

5 月 13 日・・・午前 10 時神田花房町小松屋（船宿）より船にて浅草へ行き、写真館「九一堂万寿」で撮影。この写真館は横浜馬車道などで腕を磨いた「東都隋一」の写真師と名を馳せた内田九一が明治 2 年に開業。宮内庁御用掛写真師第 1 号として明治天皇を初めて撮影。その写真はご真影として全国に広まった。役者、芸者

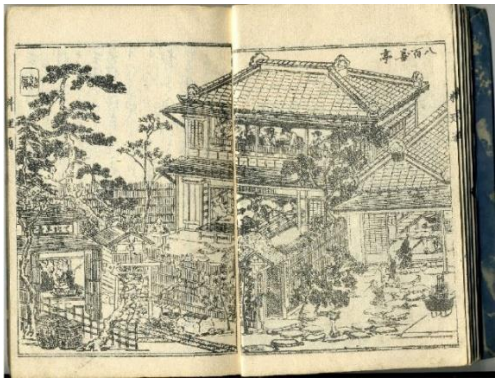
などの撮影も多く繁盛した。当時の写真撮影は高価なものであったであろう。

曽野たちが浅草の九一堂万寿で撮影した写真。それぞれ下賜された品を手にしている。前列左より飯島曽野（28 歳）、栗原ふさ（20 歳）、田島たか（48 歳）、田島まつ（17 歳）。後列左より　田島弥九郎、三河屋興右衛門（三河屋旅館の若主人）　明治 4 年 5 月 13 日撮影

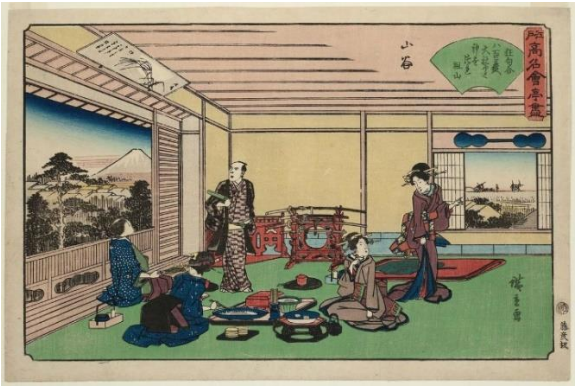
＊田島弥九郎は、この 4 人の東京への道中に付き添い、用心棒的役割を果たした。元は江戸から流れて来た剣の達人で、島村の田島家に出入りし、横浜へ蚕種を運び代金を無事に持って帰る重要な役を担っていた。島村で剣術の道場も開いていた。

この 6 人のメンバーで浅草で写真を撮影し、船に乗り、浅草山谷堀の料理屋八百善へ昼食に出かけ、その後、向島の三囲神社に参拝し、帰郷前日の東京見物を楽しんでいる。

◆曽野たちが昼食をとった料理屋八百善とは



当時の八百善



歌川広重に描かれた八百善内部

曽野たちは帰郷の前日、東京観光を楽しんでいる。その中でも驚くのは将軍や大名たちが贔屓にしていた江戸の高級料亭「八百善」で昼食をとっていることである。筆者は八百善の縁者に過去聞き書きをしているので曽野たちが訪問していることに驚いた。現在も場所を変えて営業している八百善について詳細を述べる。

1717 年(享保 2 年)浅草山谷堀にて創業。もとは将軍家に上納する米を作る農家から始まり、後に野菜を売る八百屋の善四郎が「八百善」と呼ばれ、江戸の文化人や大名などが顧客の料理屋。1 両 2 分（約 15 万円）の極上のお茶漬けで有名になった。4 代目栗山善四郎の時に会席料理を確立し、江戸で最も成功した料亭のひとつである。1820 年頃(文化文政期)には、11 代将軍徳川家斉も通うほど名高い料理屋へと登りつめ、狂歌師大田蜀山人が『詩は五山 役者は杜若 傾はかの 芸者はおかつ 料理八百善』と歌うなど、江戸文化を食の面で牽引。当時の料理番付でも別格扱いされており、広重や国貞、英泉にもたびたび描かれている。八百善が文政五年に刊行した『江戸流行料理通』は当時の料理テキストとも言うべきものだが、蜀山人が序文を寄せ、谷文晁、葛飾北斎らが挿画を描いて評判になり、参勤交代の武家や商人たちの江戸土産として人気を博し、全国に八百善の名前が知れ渡ることとなった。明治 2 年まで重版がかさねられたので江戸との交流のあった島村でも、江戸土産としてもたらされていたかもしれない。その後、天保の改革での営業停止命令、幕末維新の動乱、関東大震災、東京空襲での店舗焼失などの危機を乗り越え、300 年後の現在も店を構える。2022

年に鎌倉から横浜へ移転した。小説のモデルにもなっており、宮尾登美子著「菊亭八百善の人びと」、松井今朝子「料理通異聞」などがある。

八百善栗山家には、川越の織物商の姪が嫁いでおり、筆者は 2003 年に八百善 8 代目栗山善四郎の娘である柴悠基子さん（87 歳 1916 年生まれ）に取材をしているその一部を紹介する。

「私の父は八百善の 8 代目、父方の私の祖母や江は、川越の織物商中島久平の姪です。中島久平は、幕末に横浜で生糸や蚕種の輸出に関わり、英国製の紡績木綿糸を横浜で見つけ、それを川越周辺の織元に持ち込み、唐桟という細い木綿糸の絹のような織物を作らせました。それが江戸で人気になり財を成しました。今の川越の蔵造りの建物の多くは、その当時、唐桟を扱った織物買い継ぎ商たちが建てたものです。中島家は日本橋にも支店があり、綿糸商の前川太郎兵衛とも交流しました。川越では番頭の西澤慎吉に座繰り工場を任せ製糸をやっていました。西澤は富岡製糸場へ川越藩士の娘を送っています。私の祖母のや江は、明治 12 年に八百善に嫁ぎ、後に勝海舟に名女将と言われた女性でした。明治になり、勝海舟は天璋院さまや和宮さまとお店にいらしたこともあるそうです。私どもは、震災後は築地に住み、9 代目市川團十郎宅とはお隣で親戚でした。

代々家に伝わる話ですが、幕末に八百善 6 代目は、御用提灯をもった幕府御用人に取り囲まれ、半ば拉致されるように連れていかれ、ペリー提督のご接待を否応なしに引き受けさせられたそうです。『百川』という同じく江戸の料理屋と相談し、たいへん豪華な料理を並べたそうですが、提督は和食はお好きではなかったようです。震災や空襲にも関わらず、蔵が残りましたので、江戸時代からの調度品や器が多数残されておりました。永井荷風先生はうちのお店で結婚式を挙げられ、映画に連れて行って頂いたこともあります。お通夜には八百善の料理をもって市川まで伺いました。」

八百善が当時の文化人や上流階級の顧客を持っていたことがよくわかると思う。浅草の写真館での撮影や八百善の昼食など、島村出身の曽野たちにとって、楽しい体験だったにちがいない。江戸の名店八百善を予約した人物、支払いをした人物は不明である。翌年開催された第 2 回宮中御養蚕は田島弥平が世話人となり、11 名が参加しているが、八百善に行ったのは第 1 回目の曽野たちだけである。

◆八百善の江戸料理について　店舗訪問　　10 代目栗山善四郎氏談

「300 年の歴史のある八百善には 5 千もの献立があり、そのうち現代に伝えたいもの、八百善らしいものを 130 選び、会席料理として提供している。口伝されてきた伝統的な作り方を下敷きにしながら、どの時代もその時の当主がアレンジを加え、代々伝えて来た。「ねぎま鍋」「かつおのたたき」（土佐風のあぶったものではなく、酢で締めて手で叩く）素朴な「茶粥」、江戸当時、長崎風として話題を集めた卓袱料理などを季節に応じて提供している。東京都江戸東京博物館が 1993 年に開館した際には、江戸料理を提供する大規模なレストランとして東京都から出店を依頼され、天皇皇后両陛下にも江戸料理を親しんで頂いた。その後、銀座、新宿高島屋、鎌倉へと移転しながら江戸料理を伝えている。江戸期から伝わる古伊万里や、漆器を使っているので器も味わってほしい。」なお、飯島曽野の子孫の飯島のり子さんも八百善を訪れ、150 年前に高祖母曽野が味わった江戸料理を賞味された。

八百善 10 代目（右）11 代目（左）

八百善当主による解説

現在の店舗（横浜市）

◆おわりに

深谷本陣の取材で訪れた飯島のり子さんに、高祖母の飯島曽野が第 1 回宮中養蚕に関わっていたことを聞き大変驚いた。埼玉県では殆ど知られていないことであったため各方面に働きかけた。その後、曽野の宮中ご奉仕は埼玉県の HP や埼玉新聞でも紹介されることになった。その後、曽野の日記の現代語訳を「ぐんま島村蚕種の会」の田島信孝氏に送付したことで、150 年前の田島武平と飯島曽野の子孫が初めて会うという機会を作れたこともこの「絹ラボ」のおかげである。東京の名店、八百善での食事に関して最大の謎が、誰がこの店を予約し、資金を出したかである。また、帰郷に際しての当時最新の乗り物で高価でもあった人力車も用意されている。田島氏も飯島氏も家に残る記録などを見てもそれぞれ全く思い当たる節がないという。しかも八百善に行ったのは第 1 回目の 4 人たちだけである。飯島のり子さんは、武平でないとすると渋沢栄一が手配したとしか考えられないという。渋沢が美子皇后から直々に依頼された宮中での初めての養蚕。成功するかどうか未知のものであった。それが無事に終了し、たいそう皇后は喜ばれた。自分の故郷の 4 人の女性たちが奮闘してくれたのである。日本の国富のためのモデル事業を無事に完遂してくれたのだ。渋沢栄一が武平に依頼し始まったこのプロジェクト、資料的裏付はないが、飯島のり子さんの推測の通り、浅草の写真館、八百善、人力車は渋沢の 4 人の女性たちへのプレゼントであった可能性は否定できない。また、後に美子皇后は伊藤博文が推進する「宮中の洋装化」にも協力していくが、その際に生地は国産のものを使うように指示している。島村の女性たちと蚕を飼い、その繭で羽二重や綸子を織らせた経験が、美子皇后のなかで生きていたのであろう。雅子皇后に受け継がれている近代宮中養蚕の始まりに渋沢栄一や島村、埼玉及び群馬の女性が大きく関わっていたことを広く伝えていきたいものである。日本の養蚕が絶滅寸前の今、最後の砦は始まりと同じく宮中になるのかもしれない

また、多大なご協力を頂いた飯島家の深谷本陣の建物は、本陣遺構として深谷市指定文化財であるが、土地区画整理事業により現地での現状維持の危惧があることを記しておきたい。

◆参考資料

『第 1 回宮中御養蚕日記』飯島曽野著　『宮中養蚕日記』田島民著　『宮中ご養蚕の始まり』ぐんま島村蚕種の会『皇室のご養蚕と島村』町田睦著　『蚕の村の洋行日記』丑木幸男　『歴史を拓いた明治のドレス』吉原康和著　『深谷市史』『絹先人考』上毛新聞